

鹿

フォト劇場 (61)

写真が生まれるものがたり

ほそき手をふるはせ泣きぬしみどりごが左右に子
を抱く父親になる
勝木ひさ子

予定日より早く産まれた息子は、瘦せて手足が細かった。その姿に奈良公園で見た仔鹿が重なった。まだしっかり立てなかったのか、怖がっていたのか肢が震えていた。あの仔鹿もやがて健やかに成長したことだろう。

初めての旅より戻りし子の鹿は母さん鹿と喜び合
へり
門倉みつ子

鹿は山野に棲み、木の実や草を食む野生動物であるが、昔から詩歌に詠まれている。人に馴れやすく、奈良公園では放し飼いの鹿が赤信号を守るなど、大仏様より人気があるそうだ。雄鹿の角切りは秋の風物詩である。



写真・木畑紀子

斑の白、四肢の八の字は張りつめて仔鹿が立つよ
はじめて立つよ
河合育子

生まれたばかりの仔鹿は懸命に立ち上がる。
いのちは日々、奇跡を起こす逞しさを持つ。
同時に、いのちは儚い存在でもある。だから
こそ一瞬一瞬の生が輝く。平和でも安全でも
ないこの星の、すべてのいのちに幸あれ。

杳き森の木洩れ日に触るる古る人の祈りの断章
天迦久神
伊田史織

日常のふとした光景に神々しさを感じるこ
とがあります。それは雲に射し込む光の加減で
あったり、一、二片の雪が、それっきり、ま
るで意味を持つように降ったり。物語はそう
して生まれたのだと思いました。